報告事項No. ２

令和7年度　川崎市学習状況調査　報告
概要

第1章　川崎市学習状況調査の概要

Ⅰ　調査の概要

1　調査の目的

〇**児童生徒、**保護者は、学習の取組を振り返り、課題を的確に把握し、**学習改善に生かす**。
〇**学校は、**学校教育目標等で示した資質・能力の育成に向けて、調査結果を分析し、個に応じた指導や学校（学年）での**授業改善**、教育課程編成等に生かす。
〇校長会、各研究（部）会は、教育委員会と連携して全市的な結果の分析と授業改善の具体的な手立て、個に応じた指導の手立て等を研究し、説明会や各研究（部）会の事業等で教員に伝達する。
〇教育委員会は、全市的な児童生徒の学習状況を経年調査することにより、学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

2　調査の内容

〇教科調査　　小学校　国語・算数　　中学校　国語・社会・数学・理科・英語
　調査の目的に基づき、学習指導要領に定める内容のうち、ペーパーテストで調査を行うことが適当な項目について調査を実施しました（前年度までの学習範囲）。
〇学習意識調査
　児童生徒の学習や生活に対する意識等について明らかにするために、児童生徒を対象とする調査を実施しました。
〇調査の対象及び人数
　市内全市立小学校の第4学年　11,802名、第5学年　11,850名、第6学年　11,600名
　市内全市立中学校の第1学年　9,499名、第2学年　9,149名、第3学年　9,086名
〇調査実施期間　　令和7年4月8日（火）～25日（金）

〇分析方法について

・**4層分析について**

調査の目的の実現に向けて、より詳しい学力層別の傾向や状況を把握し、各層に適した支援や学習改善、授業改善に生かすために、4層分析を行っております。

この4層分析は、教科調査において、川崎市内の受検者を、教科ごとに調査結果の高い者から並べ、意識調査は、小学校は2教科、中学校は5教科の合計点で並べ、**上位からおおむね25%ずつをA～D層の4層に分け、その結果を分析するものです。**教科調査の数値はA～D層のそれぞれの平均正答率を示しています。意識調査の数値は肯定的な回答割合(「よくわかっている」「まあわかっている」等)を示しています。

各層の学習等に関するデータや各層間の差、同一母集団の経年変化などに着目して、取組の成果や課題を捉えていきます。

・教科調査の分析及び学習意識調査の分析の視点について

教科調査…全体との比較　同一母集団の経年比較　4層分析におけるC-D層間の差の比較

学習意識調査…4層分析とC、D層の経年変化の比較

・表の見方について

【全体(参加自治体全体)との比較】

例. 令和7年度小学校2教科平均正答率の全体との差

R7	2教科平均正答率		
	川崎	全体	差
小4	73.7	72.7	+1.0
小5	69.2	68.1	+1.1
小6	68.3	66.9	+1.4

令和7年度小学校6年生2教科平均正答率の全体との差
(令和7年度市の6年生の2教科平均正答率)
－(令和7年度全体の6年生の2教科平均正答率)
＝ 68.3 － 66.9
＝ +1.4

【C-D層の差】

例. 4層分析 と C-D層間の差(小学校国語の平均正答率)

2教科平均	川崎市学力層別				
	A層	B層	C層	D層	C-D差
R7・小4	94.3	84.6	72.6	43.3	29.3
R7・小5	92.3	79.9	65.7	39.0	26.7
R6・小4	91.7	79.4	66.3	39.6	26.7
R7・小6	93.4	79.9	63.2	36.6	26.6
R6・小5	88.7	72.8	57.0	32.5	24.5
R5・小4	92.2	80.9	68.6	42.3	26.3

令和7年度小学校6年生における
(C層の平均正答率)－(D層の平均正答率)
＝ 63.2 － 36.6
＝ 26.6

【経年比較】

例.【授業の理解度】同一母集団の4層ごとの経年変化(小学校4教科平均)

年度・学年	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R7・小6	83.9	96.2	90.3	81.8	67.6
R6・小5	85.3	96.2	90.7	84.0	70.5
R5・小4	85.6	94.7	90.1	84.7	72.6

－2.9

令和7年度小学校5年生D層の前年度との経年比較(差)
(令和7年度小6D層の肯定的回答率)－(令和6年度小5D層の肯定的回答率)
＝ 67.6 － 70.5
＝ －2.9

第2章　カリキュラムセンター・分析委員会による分析

Ⅰ　令和6年度までの取組

1　授業改善の手立て

令和6年度までの結果において、小学校2教科、中学校5教科の平均正答率を見ると、C-D層間の差が他の層間に比べて大きいことと、学習意識調査の理解度の項目について同一母集団の経年比較を4層に分けて見ると、D層の低下の幅が大きいことから、D層に特に注視して、次のような手立ての実践を大切に授業改善に取り組めるよう進めてきた。

1「何がわかっていて、何がわかっていないか」について、児童生徒が自覚できるようにする。

2　わからないことに対して諦めず、粘り強く取り組むために、ねらいを明確にしたペア学習やグループ学習を取り入れる。

3　いつでもGIGA端末等を活用して、学習に取り組める環境を整備する。

第2章　カリキュラムセンター・分析委員会による分析

Ⅱ　小中学校の全市結果と分析、手立て

赤枠 成果と捉えられる点
青枠 課題と捉えられる点

1　各教科の結果概要

○**同一母集団の経年比較**　川崎市と参加した自治体全体（以降「全体」と表記）の差
（令和5年度から令和7年度）※値は、川崎市と全体のポイントの差を表しています。

小学校　2教科平均正答率（国語、算数）

	川崎市と全体の平均正答率の差		
	R5 小4	R6 小4	R7 小4
小6	＋1.4		
小5	＋0.7	＋1.1	
小4	－0.6	＋0.4	＋1.6

川崎市と全体の平均正答率の差を見ると、令和5年度の小4は全体より0.6ポイント下回っていたのが令和7年度には1.4ポイント上回っています。

中学校　5教科平均正答率（国語、社会、数学、理科、英語）

	川崎市と全体の平均正答率の差		
	R5 中1	R6 中1	R7 中1
中3	＋1.9		
中2	＋1.5	＋1.5	
中1	－1.1	－0.1	－0.3

川崎市と全体の平均正答率の差を見ると、令和5年度の中1は全体より1.1ポイント下回っていたのが令和7年度には1.9ポイント上回っています。

全体との差について同一母集団の経年変化を見ると、現小6、中3ともに学年が上がるにつれて川崎市が全体を上回っている。

○令和6年度と令和7年度の結果から

令和6年度までに行ってきた手立ての結果として、次のような結果が見られた。

教科調査の平均正答率（小学校は2教科、中学校は5教科）
同一学年（小6、中3）の4層分析

小学校

2教科平均	A層	B層	C層	D層	
R7・小6	93.4	79.9	63.2	36.6	+4.9
R6・小6	88.5	71.2	54.7	31.7	−6.8
R5・小6	90.6	76.4	61.2	38.5	

中学校

5教科平均	A層	B層	C層	D層	
R7・中3	87.0	70.6	52.8	31.9	+3.9
R6・中3	84.6	67.8	50.5	28.0	−3.0
R5・中3	86.2	69.7	53.2	31.0	

小6と中3のD層は、昨年度から今年度にかけて正答率が上昇している。

○教科調査における4層分析 と C-D層間の差

※「A層」「B層」「C層」「D層」の欄は平均正答率（%）を、「C-D差」の欄はC層とD層のポイントの差を表しています。

小学校

2教科平均	A層	B層	C層	D層	C-D差
R7・小6	93.4	79.9	63.2	36.6	26.6
R6・小5	88.7	72.8	57.0	32.5	24.5
R5・小4	92.2	80.9	68.6	42.3	26.3

層間の差　13.5　15.8　26.6

中学校

5教科平均	A層	B層	C層	D層	C-D差
R7・中3	87.0	70.6	52.8	31.9	20.9
R6・中2	83.2	64.4	48.3	29.0	19.3
R5・中1	87.0	73.3	60.9	40.9	20.0

層間の差　16.4　17.8　20.9

各層間に着目すると、**小中ともにC-D層間が他の層間よりも大きく開いている。このことは、他の学年でも同じ傾向である。**

教科全般を通しての状況と授業改善のポイント

【状況】

○ 知識・技能を習得する際に、その意味や方法について、他の学習内容との関連や、それとの違いなどについて思考することを通して、学習を進めることが必要です。

○ 問題文などから与えられた条件、状況に対し、既習と比較してどのようなつながりがあるのかを考えたり、条件や状況に合わせて自分が考えたことやその思考の流れを伝えたりして、知識・技能を活用して説明するなどの活動を行えるよう支援していくことが必要です。

【授業改善のポイント】

○ 概念的な理解に向けて、言語や数量、図形、事象などの見方・考え方を働かせた協働的な学び取り入れた授業の充実を図ることが大切です。

○ 単元や題材などの時間のまとまりをデザインする際は、身に付けさせたい資質・能力を明確にすることが重要です。その際、各教科の見方・考え方を働かせた深い学びが実現できるよう、言語活動の充実などを図ることが大切です。

○ 知識・技能の定着を促すには、理解することだけに留めず、学習したことを日常生活や他の学習で活用することを通して、わかる楽しさを実感できるようにすることが大切です。また、児童生徒が主体的に知識・技能を獲得していく学習場面を設定することが大切です。

○ 習得した知識・技能を活用して課題解決を図る場を設定することが大切です。その際、「何故そうなるのだろう」「どのようにしたらよいのだろう」という問いを大切にすることが重要です。

○ 児童生徒が考えを伝え合い、課題解決に向かう場面の設定が必要です。また、自己の学びを振り返り、学習内容のつながりを考えたり、さらに発展させて考えたりすることを、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で計画的に位置づけて行うことが大切です。

Ⅲ　学習意識調査の結果

○**【授業の理解度】同一母集団の4層ごとの経年変化**　※数値は「授業がよくわかっている、まあわかっている」と肯定的な回答をした児童生徒の割合（%）。

小学校（4教科平均）

年度・学年	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R7・小6	83.9	96.2	90.3	81.8	67.6
R6・小5	85.3	96.2	90.7	84.0	70.5
R5・小4	85.6	94.7	90.1	84.7	72.6

中学校（5教科平均）

年度・学年	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R7・中3	66.4	89.8	76.6	60.5	39.9
R6・中2	66.0	90.1	75.5	59.3	39.7
R5・中1	71.1	90.1	78.6	65.8	50.2

−6.5　−10.5

理解度は学習の難易度の関係で学年が進むにつれて下がる傾向にある。川崎市も**同一母集団の経年変化に着目すると、C、D層で前年度を下回ることが多い。特に中1から中2での下回り幅が大きい。**

学年全体の平均値は、中2から中3にかけて前年度を上回り、層ごとに見るとA層以外のB、C、D層が前年度を上回っている。

Ⅲ　学習意識調査の結果

○今年度の手立てに向けて

(1)昨年度までの結果と今年度の結果から

・平均正答率を4層分析で見ると、D層の結果の上昇が見られる。
・平均正答率を4層分析で見ると、C-D層間の差が他の層間より大きく開いている。
・理解度については、中3を除き、C層、D層で前年度を下回っている。
・以上3点から、D層の結果の上昇は見られるものの、引き続きD層に注視した取組が必要。

(2)今後の手立て

今後さらに必要と考えられる手立てを考えるために、
・**分析委員会などの検討から得られた必要な授業改善のアイデアの視点**から
・**課題となる理解度の低下と同じ傾向として、C層、D層の結果の低下が見られる質問項目**に注目する視点から**下の3つの質問項目に焦点を当てた**。

①授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている。
②自分の意見や考えを相手にわかりやすく伝えることができる。
③算数・数学の授業で、文章や式、図や表などを組み合わせて自分の考えを説明したことがある。

Ⅲ　学習意識調査の結果

※数値は「とてもあてはまる」「まああてはまる」と肯定的回答をした割合（％）。

○【学習への意識】同一母集団4層ごとの経年変化（現小6・中3）

質問項目①授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている。

小学校

年度・学年	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R7・小6	70.5	87.0	77.3	64.2	53.8
R6・小5	70.4	85.3	74.2	65.8	56.3
R5・小4	74.9	81.4	76.9	74.0	67.4

中学校

年度・学年	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R7・中3	67.4	85.1	75.3	62.0	47.6
R6・中2	62.4	80.5	67.9	57.9	44.1
R5・中1	69.4	83.2	75.3	66.3	52.6

小学校はC層、D層において、学年が上がるにつれて、下がり続ける傾向である。中学校は、中1から中2を見ると、B層、C層、D層において、およそ5ポイント以上低下している。

Ⅲ　学習意識調査の結果

※数値は「とてもあてはまる」「まああてはまる」と肯定的回答をした割合（％）。

○【学習への意識】同一母集団４層ごとの経年変化（現小６・中３）

質問項目②自分の意見や考えを相手にわかりやすく伝えることができる。

小学校

年度・学年	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R7・小6	65.7	80.3	71.5	61.2	49.9
R6・小5	67.0	79.7	69.7	63.5	55.2
R5・小4	71.6	79.7	73.5	69.1	64.1

中学校

年度・学年	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R7・中3	63.1	75.1	67.5	59.0	51.4
R6・中2	60.6	73.1	65.0	57.3	47.4
R5・中1	65.6	76.7	68.5	64.1	53.2

小学校はC層、D層において、学年が上がるにつれて、下がり続ける傾向である。中学校は、中1から中2を見ると、C層、D層において、およそ5ポイント以上低下している。

Ⅲ　学習意識調査の結果

※数値は「とてもあてはまる」「まああてはまる」と肯定的回答をした割合（%）。

○【学習への意識】同一母集団4層ごとの経年変化（現小6・中3）

質問項目③算数・数学の授業で、文章や式、図や表などを組み合わせて自分の考えを説明したことがある。

小学校

年度・学年	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R7・小6	69.3	89.0	78.6	64.2	45.9
R6・小5	69.9	87.9	76.7	66.1	49.0
R5・小4	71.7	83.9	76.9	69.3	56.6

中学校

年度・学年	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R7・中3	55.2	76.7	64.3	49.7	31.9
R6・中2	54.0	77.5	61.0	48.0	30.8
R5・中1	65.6	86.3	75.5	59.6	41.2

小学校はC層、D層において、学年が上がるにつれて、下がり続ける傾向である。中学校は、中1から中2を見ると、B層、C層、D層において、およそ10ポイント以上低下している。

Ⅳ　調査結果のまとめと手立て

１　調査結果の成果（●）と課題（●）

（1）成果

●（教科）2教科及び5教科平均正答率の川崎市と全体の差に着目して比較すると、小学校は調査を実施した全ての学年、中学校は中2、中3が全体より上回る結果であった。

●（教科）川崎市と全体の平均正答率の差について経年で比較すると、令和5年度の小4は全体より下回っていたが令和7年度には上回るなど、経年比較ができる小5、小6、中2、中3で良くなっている。

●（意識）理解度について、同一母集団の経年比較をすると、中2から中3の変化を見ると上昇している。（A層以外のB、C、D層が上昇している。）

（2）課題

●（教科）4層分析において各層間の差を見ると、小学校は2教科全ての学年で、中学校は社会の中1、中2、理科の中2を除く5教科全ての学年で、C-D層間の差が最も大きく開いていた。

●（意識）理解度の4層分析の経年比較では、D層は小4から小5、小5から小6、中1から中2、C層は、小5から小6、中1から中2で、他よりも大きな低下が見られる。

●（意識）C、D層は、自分の考えを他者に伝えることが苦手である。その理由としては、意味や考え方について、他の学習内容との関連や、他の考えとの違いなどについて思考できないことなどが挙げられる。

（3）まとめ

・**川崎市と全体の平均正答率の比較では、学年が上がるにつれて良い傾向となり、授業改善の成果が表れている。**

・**理解度等の質問項目で低下が大きいC、D層に着目した授業改善を進めていくことが大切である。**

Ⅳ　調査結果のまとめと手立て

２　今後の手立て

全ての児童生徒が「わかる」を実感できる授業の実現を目指す

C、D層の児童生徒に着目

学習状況調査の結果を生かした授業改善の視点

１「何がわかっていて、何がわかっていないか」について、児童生徒が自覚できるようにする。

２　わからないことに対して諦めず、粘り強く取り組むために、ねらいを明確にしたペア学習やグループ学習を取り入れる。

３　いつでもGIGA端末等を活用して、学習に取り組める環境を整備する。

継続実施

今後重視するポイント

○ C、D層の疑問や考えを大切にした授業展開を心がけること

・C、D層の「ここまでできたけど、この先が…」や「この前学習した〇〇を使いたいけど…」など、つぶやきや様子を見取り、途中まで考えた意見や考えを大切にすること。

○ いくつかの考え方を関連付けて理解できるようにすること

・児童生徒の多様な考えの中にある、各教科等で大事にしている考え方に焦点をあてられるように、その考えを価値づけたり、発問や問い返しを工夫したり、板書の構造化を図ったりして理解につなげる。

○「わからない」や「途中までわかる」を踏まえた、自分の考えを表現できるようにすること

・考えたことや聞いたことなどを、他者に向けて表現する機会を意図的・計画的に設定する。

参考資料　教育委員会事務局各部署による分析

教育政策室（政策推進担当）

キャリア在り方生き方教育の視点 「自分をつくる」

質問番号：【123】(小4・5)、【126】(小6)、【139】(中1)、【144】(中2・3)】
質問内容：将来の夢や目標を持っている。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	86.9	87.1	87.6	88.6	84.3	2.8
令和7年度・小5	84.5	84.0	83.9	84.7	85.4	-1.4
令和6年度・小4	86.6	86.9	87.3	88.4	83.6	3.3
令和7年度・小6	80.2	80.1	79.6	79.7	81.7	-1.6
令和6年度・小5	84.1	82.5	83.2	85.5	85.4	-2.9
令和5年度・小4	86.8	87.1	87.7	87.8	84.5	2.6
令和7年度・中1	80.8	78.4	80.2	82.3	82.4	-4.0
令和7年度・中2	69.0	68.0	68.9	68.8	70.6	-2.6
令和6年度・中1	80.1	79.3	79.3	80.0	81.9	-2.6
令和7年度・中3	69.0	68.8	68.8	70.1	68.7	0.1
令和6年度・中2	69.4	68.9	68.3	69.0	72.1	-3.2
令和5年度・中1	80.0	77.4	80.4	80.3	82.1	-4.7

質問番号：【126】(小4・5)、【129】(小6)、【142】(中1)、【147】(中2・3)】
質問内容：自分には、よいところがあると思う。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	85.0	88.0	87.4	85.6	78.9	9.1
令和7年度・小5	82.3	86.3	83.3	82.3	77.4	8.9
令和6年度・小4	83.9	88.0	85.5	83.9	78.0	10.0
令和7年度・小6	79.3	82.1	80.0	79.3	76.1	6.0
令和6年度・小5	80.9	84.6	82.0	80.0	77.0	7.6
令和5年度・小4	84.5	87.5	86.1	84.5	79.9	7.6
令和7年度・中1	80.0	82.1	81.9	79.2	77.3	4.8
令和7年度・中2	76.7	79.9	78.4	75.9	73.0	6.9
令和6年度・中1	78.3	81.2	80.3	77.4	74.4	6.8
令和7年度・中3	76.1	79.7	77.0	75.8	72.5	7.2
令和6年度・中2	74.3	77.9	75.5	74.2	69.9	8.0
令和5年度・中1	75.5	78.2	75.5	76.1	72.3	5.9

キャリア在り方生き方教育の視点 「自分をつくる」

質問番号：【123】(小4・5)、【126】(小6)、【139】(中1)、【144】(中2・3)】
質問内容：将来の夢や目標を持っている。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
　中学2年生の結果を1年生時の結果と比較すると約10ポイント下回っており、これは昨年度と同様の結果となります。中学2年生になり、現実的な中学卒業後の進路選択への意識が強くなってくることで、様々な「夢」や「目標」を思い描きにくくなることも考えられます。
　また、小学4年生と中学3年生以外は、A層よりD層の肯定的な回答の割合が高く、夢や目標をもつことは、学習の理解度に比例するものではないと考えられます。

質問番号：【126】(小4・5)、【129】(小6)、【142】(中1)、【147】(中2・3)】
質問内容：自分にはよいところがあると思う。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
　昨年度と同程度の結果ですが、小学6年生の結果を経年で見ると、学年が上がるにつれて肯定的な回答の割合が下がっています。成長に伴い客観的に自分を見る力が育ち長所とともに課題にも気付くことなどが要因として考えられます。一方中学3年生では、学年が上がるにつれて肯定的な回答の割合が上がっています。経験の中で「よさ」を認める視点が増える、自己への新たな気付きを得る、人がもつ「よさ」について考えが広がることなどが考えられます。

【実態に応じた取組の工夫】
　「好き」や「得意」を踏まえ、「就きたい職業」に限らず、「なりたい自分の姿」から将来の夢や目標を思い描くことができるように、キャリア形成を支援していくことが大切です。また、将来の夢や目標は、「自分らしさ」を発揮していくことと深く関連するものだと気付くような取組の工夫が大切です。「キャリア在り方生き方ノート」には、自分のよさに気付くページや、自分の個性を見つめながら将来を考えるページなどがあります。また、「なりたい自分の姿」を描くには、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、変容や成長を自己評価し、自分を見つめられるようにキャリア・パスポートが活用できます。より有効な活用時期や場面を考え、年間計画等に明確に位置付けることも大切です。

教育政策室（政策推進担当）

キャリア在り方生き方教育の視点 「みんな一緒に生きている」

質問番号：【122】(小4・5)、【125】(小6)、【138】(中1)、【143】(中2・3)】
質問内容：学級みんなで協力して何かをやりとげうれしかったことがある。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	89.2	91.8	91.4	89.4	84.4	7.4
令和7年度・小5	88.9	91.2	90.2	89.4	84.8	6.4
令和6年度・小4	89.0	91.2	91.2	90.2	83.5	7.7
令和7年度・小6	88.6	89.0	89.6	88.7	87.2	1.8
令和6年度・小5	90.0	91.2	90.7	90.4	88.0	3.2
令和5年度・小4	89.9	92.0	91.1	90.6	85.8	6.2
令和7年度・中1	88.4	89.7	90.1	88.3	85.5	4.2
令和7年度・中2	86.3	89.0	87.9	85.8	82.7	6.3
令和6年度・中1	87.4	89.9	88.9	87.1	83.7	6.2
令和7年度・中3	86.8	88.6	88.2	87.6	83.5	5.1
令和6年度・中2	85.7	86.6	87.1	86.8	82.7	3.9
令和5年度・中1	87.0	88.9	87.8	87.5	83.6	5.3

質問番号：【125】(小4・5)、【128】(小6)、【141】(中1)、【146】(中2・3)】
質問内容：人が困っているときは進んで助けている。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	91.4	93.7	93.7	91.7	86.7	7.0
令和7年度・小5	91.7	93.4	92.8	91.2	89.5	3.9
令和6年度・小4	91.9	93.6	93.1	93.2	87.6	6.0
令和7年度・小6	92.2	93.2	92.4	93.3	90.1	3.1
令和6年度・小5	92.5	93.9	93.1	93.5	89.8	4.1
令和5年度・小4	92.1	94.4	92.9	92.9	87.9	6.5
令和7年度・中1	93.1	92.2	94.9	93.7	91.8	0.4
令和7年度・中2	90.1	90.1	91.9	90.5	88.0	2.1
令和6年度・中1	92.3	93.2	92.7	92.5	91.2	2.0
令和7年度・中3	89.8	89.8	90.0	90.4	89.6	0.2
令和6年度・中2	90.0	90.2	91.0	90.7	88.6	1.6
令和5年度・中1	91.5	92.1	91.7	92.4	89.6	2.5

キャリア在り方生き方教育の視点 「みんな一緒に生きている」

質問番号：【122】(小4・5)、【125】(小6)、【138】(中1)、【143】(中2・3)】
質問内容：学級みんなで協力して何かをやりとげうれしかったことがある。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
　肯定的な回答の割合が、全学年85％以上を示しています。また、小学6年生の結果では、学年が上がるにつれてA－D層の差が小さくなっています。高学年として、学級全体の協力がより必要な行事や授業の活動等が増える中で、一人ひとりの児童が学級の一員として所属感や充実感を感じていることが考えられます。中学3年生の経年で見た結果では、数値上では大きな変容は見られず、中学1、2年生については、今後の変化に注視する必要があります。

質問番号：【125】(小4・5)、【128】(小6)、【141】(中1)、【146】(中2・3)】
質問内容：人が困っているときは進んで助けている。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
　中学3年生以外は、肯定的な回答の割合が90％以上（中3は89．8％）を示しており、「困っている人を進んで助ける」という意識が高い傾向にあることが読み取れます。
　また、小学4年生のA－D層の差が他の学年と比べて大きいことが読み取れます。小学校と中学校の結果を比較すると中学校の方がその差が小さいことからも、成長に応じ、どの層もより自覚的に他者への気遣いやサポートを行うようになっていることが考えられます。

【実態に応じた取組の工夫】
　どちらの質問も全学年の肯定的な回答の割合が85％を超えていることから、引き続き、互いの人格を尊重し、協力、協働して社会を積極的に形成していく力を伸ばしていくことが大切です。
　学級で協力して何かをやりとげる活動をする際には、例えば、皆が納得できる目標や過程に着目した目標を決めたり、互いのよさや頑張りを随時振り返り認め合ったりするなど、達成感や充実感を味わえるよう指導の工夫を図っていくことも大切です。また、かわさき共生＊共育プログラムのエクササイズなども豊かな人間関係づくりに効果的です。

教育政策室（政策推進担当）

キャリア在り方生き方教育の視点 「わたしたちのまち川崎」

質問番号：【130】(小4・5)、【133】(小6)、【146】(中1)、【151】(中2・3)】
質問内容：自分の住んでいる町がすきである。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	92.4	94.7	93.2	93.3	88.4	6.3
令和7年度・小5	91.1	91.7	92.2	91.6	88.9	2.8
令和6年度・小4	92.3	95.0	93.4	92.7	88.0	7.0
令和7年度・小6	88.4	87.2	89.4	89.1	87.6	-0.4
令和6年度・小5	91.4	92.6	92.1	91.6	89.4	3.2
令和5年度・小4	91.7	93.3	92.7	91.9	88.9	4.4
令和7年度・中1	88.8	88.5	89.8	89.1	87.9	0.6
令和7年度・中2	85.1	85.5	85.7	85.0	84.4	1.1
令和6年度・中1	88.2	90.3	89.2	87.9	85.6	4.7
令和7年度・中3	83.5	84.0	83.5	84.6	82.5	1.5
令和6年度・中2	84.5	83.3	85.5	85.9	83.5	-0.2
令和5年度・中1	86.6	87.9	86.9	87.4	84.2	3.7

質問番号：【132】(小4・5)、【135】(小6)、【148】(中1)、【153】(中2・3)】
質問内容：地域や社会をよりよくするために何をすべきか考えたことがある。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	67.6	71.3	67.9	67.0	64.4	6.9
令和7年度・小5	64.3	70.9	64.6	63.4	58.4	12.5
令和6年度・小4	69.8	73.6	69.4	68.9	67.2	6.4
令和7年度・小6	65.6	69.7	67.7	65.5	60.0	9.7
令和6年度・小5	67.7	72.6	66.5	67.6	64.2	8.4
令和5年度・小4	69.1	71.0	69.0	68.4	68.2	2.8
令和7年度・中1	64.4	71.6	66.4	60.8	59.0	12.6
令和7年度・中2	53.6	59.5	57.1	50.9	47.1	12.4
令和6年度・中1	63.3	69.8	65.5	61.9	55.9	13.9
令和7年度・中3	49.5	51.8	52.2	49.4	44.9	6.9
令和6年度・中2	52.4	55.0	54.2	52.5	48.2	6.8
令和5年度・中1	62.2	68.5	63.9	61.5	54.9	13.6

キャリア在り方生き方教育の視点 「わたしたちのまち川崎」

質問番号：【130】(小4・5)、【133】(小6)、【146】(中1)、【151】(中2・3)】
質問内容：自分の住んでいる町がすきである。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
　昨年度と同程度の結果であり、肯定的な回答の割合は、全学年で83％以上を示しています。
　各学年の結果を経年で見ると、学年が上がるにつれて肯定的な回答の割合が前の学年をやや下回るとともに、A－D層の差が小さくなっていく傾向が見られます。成長に伴い、学習や生活経験の中で、自分の住んでいる町に対して児童生徒一人ひとりが、より多様な意見をもつようになっていることが考えられます。

質問番号：【132】(小4・5)、【135】(小6)、【148】(中1)、【153】(中2・3)】
質問内容：地域や社会をよりよくするために何をすべきか考えたことがある。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
　昨年度と同様に、質問130と比べると肯定的な回答の割合が下回っていることから、地域に対して好感をもっていても、よりよくするために何をすべきかを考えたことはない児童生徒がいることが考えられます。
　また、中学2年生と3年生の結果では、いずれも2年生時の結果が1年生時の結果より約10ポイント下回っています。中学生という新しい生活の中で、地域や社会と自分との関わりを考える機会に変化が生じていることも考えられます。

【実態に応じた取組の工夫】
　社会参画の意識を高めていくためには、自分の力で現実の社会問題を解決できるという、社会の創り手としての意識を育てることが大切です。そのために、地域や社会と関わりながら進める学習や、川崎市制100周年を契機にした取組などを生かしながら、「わたしたちのまち川崎」の視点を踏まえた教育活動の充実を図ります。その際、「キャリア在り方生き方ノート」にある、地域について扱っているページが活用できます。また、学校として、コミュニティ・スクールを活用した地域連携を推進するとともに、児童生徒が社会や世界とつながり、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していけるようにカリキュラム・マネジメントの充実を図ることが大切です。

教育政策室（政策推進担当）

SOSの出し方・受け止め方教育
（かわさき共生＊共育プログラム）

質問番号：【127】(小4・5)、【130】(小6)、【143】(中1)、【148】(中2・3)】
質問内容：不安やなやみ、ストレスがあるとき、だれかに相談することができている。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	67.3	69.3	67.9	67.5	64.2	5.1
令和7年度・小5	64.0	66.5	65.0	62.0	62.6	3.9
令和6年度・小4	68.6	70.9	69.0	69.6	64.6	6.3
令和7年度・小6	63.4	65.1	63.3	63.6	61.9	3.2
令和6年度・小5	64.8	67.4	64.9	64.6	62.3	5.1
令和5年度・小4	69.5	71.0	69.9	69.5	67.4	3.6
令和7年度・中1	66.1	67.6	66.3	66.4	64.4	3.2
令和7年度・中2	66.5	69.7	68.7	64.6	63.3	6.4
令和6年度・中1	65.7	68.4	67.2	65.0	62.4	6.0
令和7年度・中3	68.5	71.5	69.7	69.2	64.5	7.0
令和6年度・中2	65.2	67.3	66.9	65.3	61.6	5.7
令和5年度・中1	65.1	66.9	66.7	65.3	61.5	5.4

【分析結果】
　小学生では、学年が上がるにつれて肯定的な回答の割合が下がっているのに対し、中学生では上がっていることが読み取れます。成長の中で、自分のことを率直に相談しづらくなる側面と、相談相手が増えたり相談する力が向上したりする側面があることが考えられます。
　また、質問128（人権・多文化共生教育担当のページに掲載）の「困ったとき、なやんだときは、身近な大人が話を聞いてくれる。」という質問項目の肯定的な回答の割合が小学4年生から中学1年生で80％以上、中学2、3年生で78％以上であることを踏まえると、大人に話は聞いてもらえているが、誰かに相談はできていないと感じている児童生徒がいることが考えられます。

【実態に応じた取組の工夫】
　「かわさき共生＊共育プログラム」に位置付けている「SOSの出し方・受け止め方教育」を引き続き推進します。エクササイズを通して学んだ、自分の心を見つめることやSOSの出し方などを実生活に生かそうとする意識を育てるとともに、子どもも大人もSOSを受け止める「受容傾聴」の姿勢などについて理解し、安心して相談できる環境づくりをしていくことが大切です。

教育政策室人権・多文化共生教育担当

質問番号:【129(小4・5)132(小6)145(中1)150(中2・3)】
質問内容:自分のことは自分で決められるよう、身近な大人が助けてくれる。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	84.0	88.0	86.1	82.8	78.9	9.1
令和7年度・小5	85.1	89.7	87.3	84.1	79.4	10.3
令和6年度・小4	84.8	89.0	85.6	84.6	79.6	9.4
令和7年度・小6	86.4	89.4	87.9	86.6	81.8	7.6
令和6年度・小5	86.2	89.5	88.1	85.7	81.5	8.0
令和5年度・小4	84.4	87.8	85.9	83.8	80.0	7.8
令和7年度・中1	88.1	91.9	89.5	87.2	83.7	8.2
令和7年度・中2	86.2	90.4	89.0	85.1	80.4	10.0
令和6年度・中1	81.1	83.1	84.1	80.8	76.4	6.7
令和7年度・中3	85.9	90.4	87.0	86.7	80.1	10.3
令和6年度・中2	84.1	87.3	86.4	84.2	78.7	8.6
令和5年度・中1	85.8	89.3	86.5	86.8	80.7	8.6

【分析結果】
質問129について、経年変化に着目すると、小・中学生共に学年が上がるに従ってポイントが上昇していることがわかります。中学生は2年生で一度下がっている学年もありますが、基本的に上昇しています。この上昇については、学年が上がるに連れて、周囲の大人とコミュニケーションが取れるようになり、相談したり、人に助けられたりする経験から、身近な大人の存在を実感する児童生徒が増えていると考えられます。特に、中学校3年生では自分の進路選択を保護者や学校の先生等と共に考えながら決定するため、多数の児童生徒が実感していると考えられます。

質問番号:【128(小4・5)131(小6)144(中1)149(中2・3)】
質問内容:困ったとき、なやんだときは、身近な大人が話を聞いてくれる。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	81.2	84.3	82.9	80.9	76.7	7.6
令和7年度・小5	81.2	84.9	83.0	80.4	76.3	8.6
令和7年度・小6	81.1	83.2	81.6	81.9	78.0	5.2
令和7年度・中1	81.6	85.0	82.5	81.4	77.3	7.7
令和7年度・中2	78.9	82.1	81.6	78.1	74.2	7.9
令和7年度・中3	78.1	81.0	79.2	78.2	74.7	6.3

【分析結果】
質問128について、今年度の結果から考えると、学年が上がるに従って、ポイントが低下していることがわかります。この低下については、学年が上がるに連れて、大人に相談するのではなく、自分で考えたり、身近な友だちに相談したりする割合が増えていると考えられます。

【実態に応じた取組の工夫】

児童生徒が身近な大人に相談しやすい環境を整えるには、的確な児童生徒理解が求められます。児童生徒、保護者に対して、教職員が積極的に、生徒指導の方針や意味などについて伝え、理解を進めることや、教職員が児童生徒の心の痛みに気づき、一人ひとりの人権が尊重されているかを判断できる確かな人権感覚を身に付けていくことが、児童生徒の安心感や教職員への信頼にもつながっていきます。

そのために、子どもに関わる大人が児童生徒の声を受容・傾聴し、相手の立場に寄り添って理解しようとする共感的理解が重要になります。

さらに、児童生徒の意見表明権に目を向けて考えてみると、例えば「考えや意見を表現する」ことには、「話すこと」に加えて「書くこと」も含まれます。また「考えや意見を表現しない」ことも意見表明権の現れだとされています。「考えや意見を表現しない」児童生徒については、その背景を想像して関わる教職員の姿勢そのものが、信頼関係を築く大切な要素になっていきます。

・「子どもの権利学習」の実施

「川崎市子どもの権利に関する条例」に示されている**「7つの権利」**について知り、考え、深めることを通して、権利の実現を目指すことは大切です。

特に、身近な大人が子どもの年齢や成長に応じて対話し、相談しやすい環境を整えるなど適切なサポートを行うことは、子どもの「7つ権利」の実現に大きくつながります。子どもに関わる全ての大人が、子どもを「全面的な権利の主体」としてとらえ、子ども自身の人間性を尊重することが求められます。

子どもの権利学習資料

小学校低学年用
「かがやき」

小学校中高学年用
「みんな輝いているかい」

中学高校生用
「わたしもあなたも輝いて」

※参考 1. 人権教育の指導方法等の在り方について（第三次とりまとめ）2008年　文部科学省
2. 生徒指導提要　2022年　文部科学省

情報・視聴覚センター

質問番号:【154】
質問内容:GIGAたん末は学習の役に立つと思う。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和7年度・小4	91.8	95.2	93.7	92.1	86.2	9.0
令和7年度・小5	92.8	94.3	94.8	93.6	88.5	5.8
令和6年度・小4	91.9	95.6	93.5	92.4	86.1	9.5
令和7年度・小6	93.3	93.2	94.3	94.2	91.5	1.7
令和6年度・小5	92.7	94.0	94.4	93.3	89.1	4.9
令和5年度・小4	91.4	94.0	92.7	92.5	86.2	7.8
令和7年度・中1	93.2	94.1	95.1	93.1	90.5	3.6
令和7年度・中2	90.4	90.7	91.8	91.5	87.6	3.1
令和6年度・中1	93.1	94.0	94.9	93.9	89.5	4.5
令和7年度・中3	90.1	90.5	90.1	91.0	88.9	1.6
令和6年度・中2	89.0	90.6	90.0	89.9	85.6	5.0
令和5年度・中1	91.3	92.8	92.5	92.1	87.8	5.0

【分析結果】
同一母集団のA-D層の差は年度を追うごとに小さく、中1中2間を除き、川崎市、C層、D層の数値が増加していた。つまり、A-D層の差の減少はD層の上昇によるところが大きいことが分かる。

【実態に応じた取組の工夫】
GIGA端末の学習への有用性について、同一母集団のA-D層の差は経年で見ると小さくなっている。D層が他の層よりも大きく上昇しており、このことがA-D層の差の減少に影響している。これは、D層の子どもほど、低い学年においてGIGA端末を学習のために有効に活用できていない状況と考えられるが、学年が上がるにつれてGIGA端末の活用が進むことで、情報活用能力が高まり、その他の層よりも遅れて有用性の実感がわいてきているものと予想される。
つまり、早期からGIGA端末の学習への恩恵を受けられるようにするためにも、タイピングやインターネット検索等の初期指導や比較などの情報の整理分析の方法など、GIGA端末を活用した学び方をしっかりと身に付けられるように指導することが重要であると言える。したがって、例えば、総合的な学習の時間を軸としながら、各教科での学びの中で教科ごとの見方考え方を働かせながら学びを進めていく中で、GIGA端末を活用しながら、ダイナミズムのある学びの中で、情報活用能力を育成するといったカリキュラム・マネジメントが必要であると言える。
また、中1中2間の値の減少は小学校と中学校の間のGIGA端末を活用した学びのギャップがあることが要因と考えられる。校種を越えた好事例の横展開を一層講じていく必要がある。